

吾妻川上流限界地域における 高距集落の社会・経済地理学的研究

山 口 源 吾

は し が き

この研究調査は中央日本山岳地域の土地利用の拠点としての山地集落のうち、特に居住限界地域の集落を対象として行なったものである。

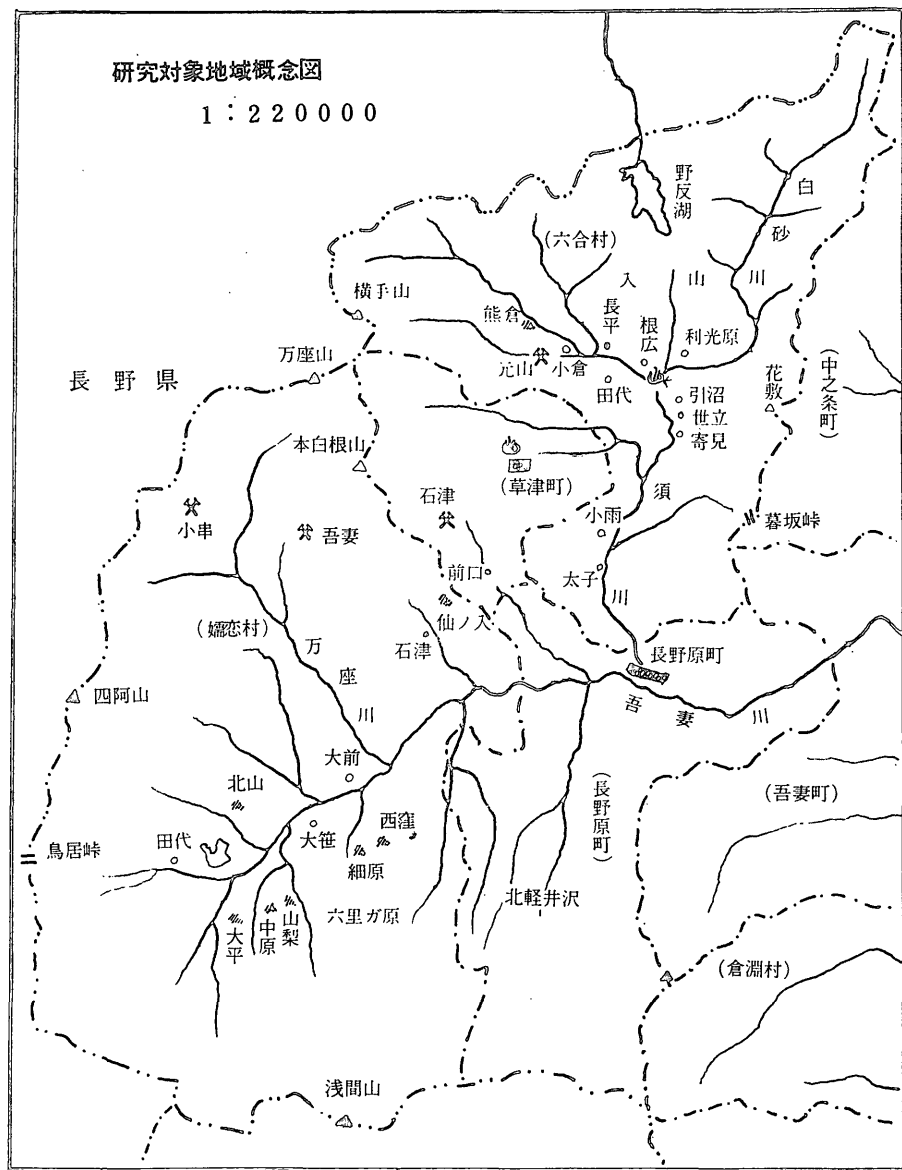
ここではその一事例として吾妻川上流地域の高距集落について記すことにする。

浅間・白根・四阿諸火山の裾合を流れる吾妻川の上流地域は山地居住の限界地域であって、そこには生活様式の異った幾つかの高距集落が存在する。この地域は行政上群馬県吾妻郡長野原町・^{つまごい}嬬恋村・草津町・六合村の四町村に分れているが特色ある高距集落は長野原町以外の三町村に含まれている。

I 嬬恋村の高距開拓集落

(1) 嬬恋村の概観

嬬恋村は東流する吾妻川本流沿の村で、その面積は336.05km²、人口13,775人の農村である。集落の多くは吾妻川の造った断続的な小段丘の上のにり、またその南北の浅間・白根・四阿の諸火山の裾野には1,00mを越える高地にまで開拓集落が認められる。集落の下限は680mで上限は田代の農場で1,250mに達する。気温は一般に冷涼で年平均気温は村役場付近で10°C、田代の農場では7.5°Cである。雨量は1,600mm前後で夏期に集中し6~8月の三カ月間にその半分以上が降る。



水田は河床や段丘に断片的に存在するだけで、その面積 192.99ha は村総面積の僅に 0.57 %に過ぎない。これに反し畑地面積は 2,449.39ha で水田の約 13 倍、特に浅間火山麓に集積し、この村が全国的な高原蔬菜村であるための基盤を提供している。また山林面積 3,845.58ha よりも無立木地の原野が 4,526.08ha と最も広い面積を占めることは、活火山麓の特性で鬼押出などの熔岩流や火山灰の被害を物語っている。

この村の第一次産品中最も高い生産を示すものは高原蔬菜である。農民の殆んどは婦恋村農業協同組合員であるから、農協取扱い農畜産物販売状況から各産品の比重を推察することができる。いまそれを第一表に求めると、数量金額共に第一位に位するものはキャベツである。その販売価格76,000万円は第一次産品総販売額 103,500万円の 3/4 を占め、白菜・馬鈴薯と共にこの村の基幹作物となっている。

第1表 主要農畜産物販売状況

(S43)

区分	キャベツ	白菜	その他の野菜	ばれいしょ	こんにゃく	米	牛乳	鶏卵	菌
数量	箱	〃	〃	kg	〃	〃	〃	〃	〃
2,294,723	104,638	79,789	1,206,800	104,500	103,560	1,813,651	7,523	41,345	
金額	万円	万円	万円	万円	万円	万円	万円	万円	万円
76,148.4	5,408.8	3,777.0	2,192.0	780.6	1,417.0	9,851.4	158.9	3,790.2	

婦恋村農業協同組合取扱数量による

販売価格において第二位を占める牛乳は飼養戸数 182 戸の 835 頭の乳牛によるものであるが、開拓集落よりも既存集落に飼育戸数が多い。火山麓の原野利用の牧牛は近年最適な産業と考えられて、昭和39年度から大規模草地改良事業がはじめられたが、蔬菜畑の拡大と競合し、また近年急激に進出しつつある大都市観光資本の土地買占めなどによって挫折している。

浅間山北麓の標高 1,200m の高冷地には戦後の入植開拓集落がある。これ等は吾妻川上流の限界地域の高距集落を代表するもので、入植後幾多の試行錯誤の結果、今日の蔬菜園芸集落として定着したものである。近年その開拓前線を標高

1,500m まで拡大しようとしているが、山林原野の開発に対する評価にはいろいろの価値判断があって、既存農家では林地原野を観光業者に売却した方が利益と考える者があるのに反し、開拓農家ではより増反開拓することが有利であると考えるなど、その選択を異にする場合が多い。

浅間山の北麓六里が原では観光資本の進出が激しく、標高 1,100~1,300m にかけては別荘地土地分譲が行はれ、既に 400 戸の建設が予定されている。いまその進出状況を見ると、立野には井上観光が、細原には大倉屋不動産が、六里が原には日本興業と北軽井沢ロイヤル観光が、赤川には三井不動産が、またその南には第一観光が、山梨開拓の南には日新観光・大正商事・伊藤忠が、鎌原には三洋開発・山一物産とまことに多彩で、当然農耕地との競合が起るものと思はれる。

婦恋村には村財政に大きく貢献する特異な集落がある。それは白根山腹 1,500m の高所にある硫黄鉱山集落である。この集落は経済変動の波を受け易く、殷盛期と衰退期とでは著しい人口の増減があり、安定した集落構成をなしていない。

(2) 高距開拓集落

浅間山の北麓には標高 1,000m から 1,200m にかけて西窪・細原・山梨・中原・大平の諸開拓が東西に連り、また四阿山麓には北山、白根山麓には仙ノ入の開拓集落がある。いずれも戦後1948年頃からの入植であるが、その土地条件は悪く火山灰土は pH4 という酸性土壌であるうえに、降霜期間が長くて作物の生育期間が短いので畑地の二毛作は不能であった。

当時は全国的な食料不足時代であった上に労働市場が狭かったので、入植者は食料自給のための耕作に専念するより仕方がなかった。

その後婦恋村が東京都の野菜指定地¹⁾ となると、野菜の供給に対して肥料その他が優先的に配給され村当局の奨励も盛となった。先駆地域田代の発展をみた開拓民は続々これに倣い、蔬菜栽培を始めた。食生活の近代化に伴ってキャベツの需要が増大し、その上輸送が鉄道貨車に代ってトラックになると東京への時間距離が短縮して、婦恋の野菜は東京で王座を占めるようになった。このため開拓農村は既村農村と共にその農業所得の基盤を蔬菜栽培におくようになり、増反や農

耕機械の導入も盛んでその積極的な経営は既存農家を凌ぐようになった。

この間離農者が出たりこれに代る補助入植があったりしたが、現在ではほぼ安定して西窪に12戸、細原に15戸、山梨に12戸、中原に12戸、大平に25戸、北山に13戸、仙ノ入に28戸が定着している。

次に生活様相のやや異なる浅間山麓の中原と白根山麓の仙ノ入とを取り上げその定着までの姿を示そう。

・中原開拓

昭和23年長野県上田市外神流村の住民が入植した。開拓計画では30戸を予定していたが、現在定着したのは22戸である。

開拓地は浅間北麓 1,200m の高冷地で、その上限は 1,250m に達する。初霜は平均 9 月 20 日頃で、冬期一月の平均気温は -6°C 、最低気温は -20°C を経験する。積雪量は約 1m に達し北西風の吹雪の日は交通が杜絶する。酸性の火山灰土には土壤改良のために石灰・溶燐・炭カルなどを加え、地力増強のためには現在なお耕地 1ha に対し 2,500kg 窒素肥料を投下しなければならない。

中原開拓の農耕作業は 3 月 10 日に始り野菜出荷終了の 10 月 20 日に終る。基幹作物のキャベツの本圃定植は 4 月末から 5 月で、出荷は 7 月中旬から 10 月下旬に及ぶ。定植はコンスタントな出荷ができるよう計画的に行はれている。各農家は平均 2~3ha の蔬菜畑を持っているが、耕作には組合共同のトラクターが用いられるので 1 戸平均 2 人の稼働力で十分である。

蔬菜栽培に初春の低温は障害である。そのためビニールハウスで育苗するほか、より低標高の既存集落に委託育苗を行っている者もある。しかし、晩生種は露地育苗が可能である。開拓者は省力と蔬菜の品質統一のための協業までには至らないが、栽培法の共同研究と共同出荷で成果を挙げるなど農業経営には甚だ積極的である。

次にこの集落の年齢構造を見ると、中学生以下の幼少年層が 28 人、60 歳以上の老年層は僅に 4 人で、その扶養者である生産年齢層が 48 人というピラミット型をなしている。これは多くの山地農村に見られるひょうたん型や逆ピラミット型と

は異り、最も理想的な構成である。また入植者の多くが農村の青年層であったから、入植後20余年を経た今日では両親と子供2人という家族構成が最も多く、すでに次代の後継者が生じている。

一方近年は各戸に有線放送電話が敷設されて開拓民の意思交換が便利となり、冬季積雪期には村有ブルドーザーが除雪に出動するなど、かつての山地農村に見られたような幾多の生活上の支障条件は次々に克服されつつある。こうした中で夫婦二人で二人の子供を養育し乍ら野菜販売による粗収入 445万円を挙げ、自家用車とトラック各一台の外トラクター、耕耘機まで所有する農家が現れた。

以前の開拓小屋はアルミサッシの窓とモルタルの建造物に代り、家庭用品の電化は都市と変らない。以上の事実はこの集落の将来に対する安定性を物語るものと思はれる。

この集落のように耕地の集積地域が得られ、農民が農業経営に積極的に且つその上に国有地を農用地に造成し、これを希望農家に払下げるような農政が行われるような場合には、高地集落は定着可能である。

・仙ノ入開拓²⁾

仙ノ入開拓は白根山の南麓に展開する火山拋出物の台地にあり、農家は石津から草津町に向う道路の南北に散在する。耕地と牧草地は混在してその標高は 1,000m から 1,100m に及んでいる。

ここは戦時中陸軍演習場であったが、戦後昭和23年以来草津町や吾妻郡東部からの入植者によって開拓された所である。しかしこの地域はもともと今井区地籍で入植以前既に5戸の農家があった所である。従って演習場跡の開放地に対しては既存農家と入植者の間で土地入手のための争奪戦が行はれたが、最後に勝利を得た者が入植者であった。

演習場跡は雑草地とからまつ林の伐採された無立木地であった。開墾はまず切株の抜根から始められた。まだブルドーザーの入手できない時代であったから開墾は総て手労働に依存した。食料自給のため、そば・ひえ・小麦が試作され、肥料代を得るために大根を組合の手を経て出荷した。

開拓地の割当は 3~4ha で平均 3.3ha、土地の状況によって差があった。栽培作物の選定はすべて試行錯誤で収益の挙らない年が続いた。その間何人かの脱落者も出たが、代りの補助入植者が 6 戸もあった。

昭和33年漸く自給体制が確立した。丁度その頃日本人の食生活も改善され蔬菜の需要が増大した。蔬菜栽培が多額の収益を上げ、作れば何でも売れるということになると、既存の先進蔬菜地田代を見習ってキャベツ畑を拡大した。昭和37年以来この開拓集落は村のキャベツの生産地域の一部を形成するようになった。栽培地域の中心は開拓地の上部斜面で旧国有林の腐植土の厚い肥沃な所である。

これに対して下部斜面は今井の採草地で地力が劣り蔬菜よりも雑穀が主であった。開拓地の下部斜面では乳牛の導入が行はれた。食料の自給に迫られた頃雑穀畑 3~4ha の耕作は家族労働だけではとても賄いきれなかった。そこで一部の農家では土地経営は粗放的でも収益のあるもの求めて酪農を始めた。丁度30年頃のことであった。初めは飼育し易い小型のジャージーを導入したが40年代に入るとホルスタインも導入した。こうして開拓農家 28 戸のうち 12 戸までが酪農家となった。仙ノ入が他の野菜栽培開拓村と異なるところはここである。

雑穀・野菜・乳牛と収入源を多角的に求めた頃は、乳牛の頭数も少なく一戸 2~3 頭が普通であったが、38年頃からは 15~20 頭を飼育する酪農専業の農家が増加した。

多頭飼育を始めてから僅に数年で困難な問題に直面した。それは飼料不足の問題である。

この地域では乳牛一頭当り採草地 0.3ha が必要である。最大 4ha の耕地しか分配されない農民は15~20頭の乳牛飼育で既に牧草地の不足に悩んでいる。濃厚飼料を自給すればコーン畑 1.2ha が更に必要となる。大都市近郊のように飼料を購入してまで飼育するには至っていない現状からは、より以上の発展は困難と思われる。この夏 (S. 45) 3 戸は酪農を中止し野菜栽培へと転換した。採草地を蔬菜畑に変えた者もある。

婦恋農協では酪農には批判的である。それは農家の稼働力と耕地面積と反収の

三点から蔬菜栽培がこの地域最適の農業と考えているからである。

仙ノ入には田代の馬鈴薯原々種農場に倣って種馬鈴薯栽培農家が3戸ある。反収 2,400kg 売価 54,000円 (S.45) であるが、反当労力が大きいので耕作面積は制限される。これに対しキャベツは反収 300 箱、単価 300 円として売価は 9 万円となり、粗収入が多い上に農耕の機械化が進んで割当てられた耕地は十分消化できるので、一毛作の畑ではキャベツ栽培がより有利であると言われている。

しかし蔬菜栽培が適地作物としてもこれには条件がある。同一条件の環境のもとで粗収入を上げるには蔬菜の反収と単価が問題となる。仙ノ入では最も反収の上るエコーがキャベツ畑の約80%を占め、日出は良質高価ではあるが出荷期間が短いので粗収入が少く、そのため耕作面積は狭い。

いま仙ノ入には28戸の開拓農家が定着している。定着によって一集落が形成された主な理由は何であろうか。それはこの地域の土地条件と開拓者のそれに対する価値判断によるものと思われる。

極めて緩かに南に傾く火山灰土の台地は、広い集積した耕地が得られ易く、耕作管理に便であり、山地溪谷で分散した耕地に比べて投下労力が少くとも土地生産性は高い。低生産性の他の地域からの入植者にはかねがね希望した開拓適地で、定住に価する土地と判断したからであろう。

(3) 国営開拓パイロット事業

1968年前後かう嬭恋キャベツの名声が挙り増産されるようになると、田代・大笹の既存農家はもちろん開拓農家でも耕地の拡大増反を望む者が多くなった。

農民は近隣に雇傭市場がなく勢い園芸耕作にその労力を投下した。一方キャベツは嫌地性を有し連作すれば根瘤病や萎黄病を多発した。これを避けるためには輪作や休耕が必要であり、輪作体系を造るためにも耕地の拡大が必要であった。

キャベツの栽培上限は標高約 1,300m で、それより高位置には国有林や原野が展開する。そこで農民は耕境を押し上げて手持耕地の30~40%の拡張を望んだ。

これに対応して農政局は国営農用地造成のため大笹に嬭恋西部開拓建設事業所を置き、浅間火山北麓と四阿火山南東麓に鹿沢・大笹・鎌原・北山の四地区を指

定して国有地 600ha 民有地 170ha を開墾しようとしている。

これは国営開拓パイロット事業と呼ばれて開墾のほか土壤改良・農道建設・防除用水・畑地灌漑用水路・橋・暗渠などの工事をなすものである。

造成地は一般に 1,200m 以上のところで、造成費用の分担は国が 70%, 県が 10%, 受益者 20% となっている。民有林は区に配分するが、国有地は一たん土地改良法による財団法人の所属とし後農地法によって個人に売却する方針である。

この事業は限界地域の既存集落の発展と開拓集落の定着を促す一手段と考えられ、高原蔬菜園芸集落の居住限界が 1,200m 以上に上昇することを可能にする行為である。

限界農業集落の上限を上昇するためには、国有林の農民への払い下げを促進して、農民の開拓意欲を満足させることが必要である。

Ⅱ 高距鉱山集落

地下資源の存在は地質構造に依存して標高とは関係なく、その採掘は鉱床に対する人間の経済的価値判断によって決定される。従って鉱山関係者によって構成される鉱山集落は低地にも高地にも存在する。

白根山の東南部には四つの硫黄鉱山と一つの鉄山があるが、いずれも昭和年代の開発で集落の歴史も浅い。標高は耕境を越え硫黄鉱山では 1,500m に達し、定住集落としては本邦最高のものである。以下それ等鉱山集落の実態を述べ、高距集落の一類型としてその特性を把握することにする。

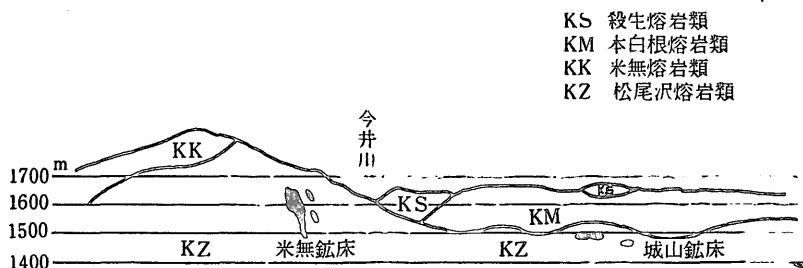
(1) 石津鉱山集落

白根火山群の南には 1,500m の等高線にそって白根（草津町）石津・吾妻・小串（嬬恋村）の四硫黄鉱山がある。この地域では古くから硫黄鉱床が認められ、1825年には草津の殺生河原³⁾で硫黄の採掘がなされたという。また草津温泉の北 8km には群馬鉄山があり、共に既村集落から離れた山腹に特異な景観をもった集落を構成していた。

集落の規模は採鉱量に比例して、白根では戸数 123 で人口 458 (S. 44), 石津は

114 戸で 362 人、吾妻は 223 戸で 616 人、小串は 367 戸で 1,076 人 (S. 43) 群馬鉄山元山は 76 戸 341 人 (S. 29) であったが、これ等集落の存在は当該町村の財政には固定資産税や鉱山税によって貢献するところが大きく、既存集落の住民にも収入の機会を与えていた。

石津鉱山は白根山南部米無山 (1,873m) の南東麓にある硫黄鉱山で、その集落は標高 1,520m に位置する。鉱山は昭和13年に創設され15年から生産を開始した。戦時中一時縮小したが戦後は一般産業の復興と共に復活して、現在精硫黄約 1 万 t と粉鉱約 2 万 t を生産している。また昭和38年には今井川の谷頭近い城山東斜面に埋蔵量 560 万 t の潜題鉱床を発見して現在掘進中である。



1 図 石津鉱山付近の地質断面図 (石津鉱業所資料による)

Scale 1 : 10,000

農業生産が土壌や気候や水によって影響されるように、鉱業生産は地質や鉱床の制約を受ける事が大きいので現地の地質と鉱床について略記する。

石津硫黄鉱山の周辺は熔岩や火山砕屑岩から構成されている。熔岩は複輝石安山岩が多く、火山砕屑岩は凝灰角礫岩で代表される。これ等の熔岩類は草津白根付近の幾箇所からも繰返し噴出したもので複雑な分布を示している。熔岩層の下には第三紀層があって、草津白根火山はこの第三紀層を貫いて噴出した成層火山である。

草津白根地区硫黄鉱床の母岩となっている熔岩類の特徴は熔岩と火山砕屑物の互層からなっていて、それ以後の熔岩類に比較して火山砕屑物の発達が著しいこ

とである。

硫黄鉱床母岩形成後も幾度か熔岩の流出があり、もとの地形の低部を埋めて鉱山南方に展開するような熔岩台地状の地形が生れたのである。

石津鉱山には新旧二つの鉱床がある。旧鉱床は米無鉱床で松尾沢熔岩流とその間に介在する火山砕屑岩を交代して生成されたものであり、鉱石は黄色硫黄鉱を主体として灰色硫黄と縞状硫黄鉱とがある。昭和39年発見された城山鉱床は松尾沢熔岩類を鉱染交代したもので、黄色硫黄鉱からなっている。また硫黄鉱帯に接して珪化硫化鉱帯の発達が著しく、これが一つの特徴と思われる。

鉱床は上部鉱床と下部鉱床とからなり、上部鉱床は長さ約 500m 幅約 180m 厚さ約 5m、平均品位は 33.3%で形態は層状で幾分傾斜し北西部に高く南東部に低い。下部鉱床は長さ約 200m 幅約 60m 厚さ 10m、平均品位は 34.9%であり、総埋蔵量は 300万 t と推定されている。米無鉱床は43年9月終掘、城山鉱床は現在稼働中である。

採鉱は坑道掘がなされ標高 1,525m の入出坑から入るとしばらくして地下水の漏下をみる。硫黄を溶かした水は pH3.0 の強酸性でたちまちレールや支柱を腐蝕する。地下水は集められて 1,450m の排水坑から今井川に放流しているが排水量は年平均 5m³/分 である。

坑内の温度は 28℃ であるが湿度が 100%と高いため蒸し暑く作業は重労働となる。そのため最盛期は昼夜四交代制であったが、現在は一日 7 時間制を採用し交代制はやめている。

製煉は総て重油バーナーによる乾式製煉法を用いていたが、現在は採掘を専一にして鉱石は草津鉱業所にトラック輸送し製煉する。

次に鉱員の労働条件をみると一日 7 時間勤務で、坑内作業と製煉作業は請負制をとっていた。それは作業能率を上げる為であり鉱員もそれを望んでいたからである。彼等従業員の平均年齢は37歳で都市の工場従業員のそれに比し高齢化している。現在 (S.45.8月) の平均賃金は 6.1 万円で、最も高いのが製煉の 8.4 万円、次が坑内勤務の 7.2万円、坑外の雑務は 4.6万円である。以上は男子の賃金

であって女子は平均 3.2万円である。賃金は主に作業の難易と作業量によって決定され、いわゆる月給制ではない。

石津鉦山集落は北海道硫黄株式会社の経営する石津鉦業所を中心に、社宅30棟110世帯、アパート3棟45世帯、合宿所2棟に入居する鉦員家族によって構成され、厚生施設として診療所、浴場、スーパーマーケット、クラブ等を有した。公共施設としては石津小中学校と保育所があって、住民の日常生活には事欠かなかった。しかし画一的な社宅群の集落であるためその集落景観は単調で、農村にみられる多彩な豊かさは無い。幸い未だ公害が発生しないので集落付近の植物景には変化を与えず、その点足尾その他に見られるような荒涼性はない。鉦山の最盛期(S.26~27)には戸数158、人口783を数え、硫黄も月産1万tと活気を呈し、法人税12,000万円を納入して村財政を潤したが、最近は石油脱硫法による安価な硫黄の輸入によって打撃を受け、人口は99人と激減して集落は淋れている。ここには伝統的な慣習を持つ渡り鉦夫が少くて地元の鉦夫が多く、現在も三原方面から28名もの通勤者があるという状態なので、飯場組織もなく、既存集落との社会集団生活上の差異は殆んど認められない。

この鉦山の開発当時は草津や三原に出るにも踏分道しかなく、硫黄は索道で旧草津電鉄まで運ばれた。その後集落の発達と共に道路が改修され、バスの通行も可能になった。会社は三原、仙ノ入方面からの通勤者や集落の高校通学生のために、石津、三原間に一日4往復のマイクロバスを運転し入山者の便を計っている。

鉦山集落の生命の長短は埋蔵量に制約される事が大きい。最近の石津鉦山集落の衰微に対しては地下資源の再開発は勿論のこと、鉦産税の減免が考慮されるよう地元民は望んでいる。最近本白根火山の地下分水と思われる単純泉が鉦区内に発見された。湧出量 600l/分、水温 60℃ で将来の利用開発が考えられている。

(2) 群馬鉄山元山

元山は草津温泉の北部三叉路の峠(1,177.1m)から長笹林道を北へ8kmの地点にある。この鉦山集落は昭和19年に開発され、わずか20年でその生命を閉じたゴウストタウンである。

この地域はもと西山と呼ばれていて、昭和12年頃硫黄試掘計画があり、昭和14年には黄色硫黄鉱から紅殻が採取されていた。昭和18年戦時の鉄不足を補うため、日本鋼管株式会社によって鉄山の開発が始り、翌19年から採掘が開始され、それに続いて社員住宅が建設されて一つの鉱山集落が形成された。鉱山関係者はここを元山と呼びそれがいつか旧名の西山に代った。

鉄山の鉱区は標高 1,050~1,250m までの地区で、集落の上限は 1,150m である。

ぬるゆ沢を埋めた鉱床は基盤の凝灰岩を覆う複輝石安山岩質の集塊岩の上に乗り、鉄鉱泉の鉄分の化学沈澱作用で生成された鉄泉鉱床であり、褐鉄鉱80%、鉄ミョウバン石20%を含んで縞状に重り合っていた。鉱床の規模は東西 2,200m、幅 100数十m である。表層数mの火山灰腐植土を除くと、その下に 20~30m の層をなしていて露天掘ができ、開発当時の推定埋蔵量は350万 t といわれていた。

昭和20年鉄鉱石輸送のために国鉄長野原線が開通した。^{おおし}太子駅裏には焼結工場が建てられ元山から太子まで 7,600m の鉄索によって鉄鉱石が運ばれた。焼結工場では鉄鉱品位37~38%を55%に精錬して川崎に輸送した。こうして最盛期の昭和23~35年頃には釜石に次ぐ日本第二位の鉄山にまで押上り、鉄山従業員のみでも 500 人を数えた。23年には小中学校分校が開設され学童も 100 人近く集落の基礎は固まったかに見えた。

元山の発生は付近の集落にも利益をもたらした。熊倉開拓では鉱夫の職を得たし、農作物の販路を獲得することにもなった。

この集落の生活上の障害は雪であった。一回の降雪量は 30~40cmであったが、風による吹き溜りのため一冬平均 1 週間は付近の集落との交通が杜絶した。その後村でブルドーザーを買入れ今はその障害は克服された。

昭和36年を頂点にこの集落は凋落した。それは海外から低廉な富鉱が輸入され、採算上それに立打ち出来なくなったからである。採鉱は次第に縮小され、昭和40年には終に閉山の止むなきに至った。索道は取外され焼結炉の火も止った。地域住民の鉱夫以外は川崎に引上げた。こうして約20年存続した元山は廃村とな

った。

今元山には荒涼たる露天掘の跡と数戸の廃屋が残存するのみである。残存施設管理のため会社職員2人が駐在し今後の再開発を待っている。しかし鋼管鉦業会社も村当局も将来の再開発計画は建てていない。管理事務所の前の広場に見られる12頭の乳牛は鋼管所屬の関東霞が関牧場が住宅団地化のために追われてきたもので、酪農場開拓の為のものではないという。もともと営林局からの鉦区購入条件は鉦石採掘であり、今後5年間は現状を維持しなければならない。

この集落が閉山後他に道を求めて転換し新しい集落として存続できなかったのは、住民の大部が会社所屬の鉦員であり、地縁集団を形成せず、地域住民との精神的紐帯としての神社・寺院を持たず、終戦直後とは異って就職の機会が至る所にあったという事情によるものである。その点発生の異なる北隣の熊倉開拓は閉山後も、草津温泉を市場とする畑作物によって存続している。鉦山集落は永続的資源利用でないから盛衰が著しく、他の産業との結合のない場合はそれが端的にあられる。

Ⅲ 高距温泉集落草津

本白根火山の東麓には幾度か噴出した熔岩流と火山碎屑物の互層からできた熔岩台地に似た地形があり、それを切って東流する湯川の谷頭に発達したのが温泉集落草津である。

温泉は市街地の中央にある湯畑をはじめ、西の河原、熱の湯、白旗の湯、地藏の湯、千代の湯等100余ヶ所から湧出し、その湧出量は36,000l/分といわれ、別府温泉に次ぎわが国第二の豊富さを誇っている。泉質は強酸性で湯畑ではpH1.7を示し温度は64℃、西の河原では56℃である。

この温泉湧出口群は草津の最大の資源で、湯川の谷を埋めて数階の旅館が群立し、一大温泉観光地を造っている。

・集落の発生と発展

草津温泉は12世紀の頃、現六合村の入山小倉の木地師の共同浴場として開かれ

たものとも言われている。江戸時代には徳川幕府の直轄地であり、草津千軒という伝承のあることから多数の人家があり、既に湯治客相手の一集落を構成していたものと思われる。

六合村の小雨から沼尾にかけては、耕地や宅地に古い屋敷跡が残っている。これは「冬住み屋敷」と呼ばれるものの跡で、明治初年まで草津の住民はここに冬の住居を持ち、秋も中ば旧暦10月8日から翌年4月8日卯月の花祭の日までここで越冬していたのである。

しかし小雨の金蔵寺は草津の光泉寺の冬住み寺であったが、明治初年からは冬住みがなくなったというし、明治7年光泉寺を仮校舎として草津小学校が発足していることを見ると、既にこの頃から草津に常住する者が出来たことが立証され

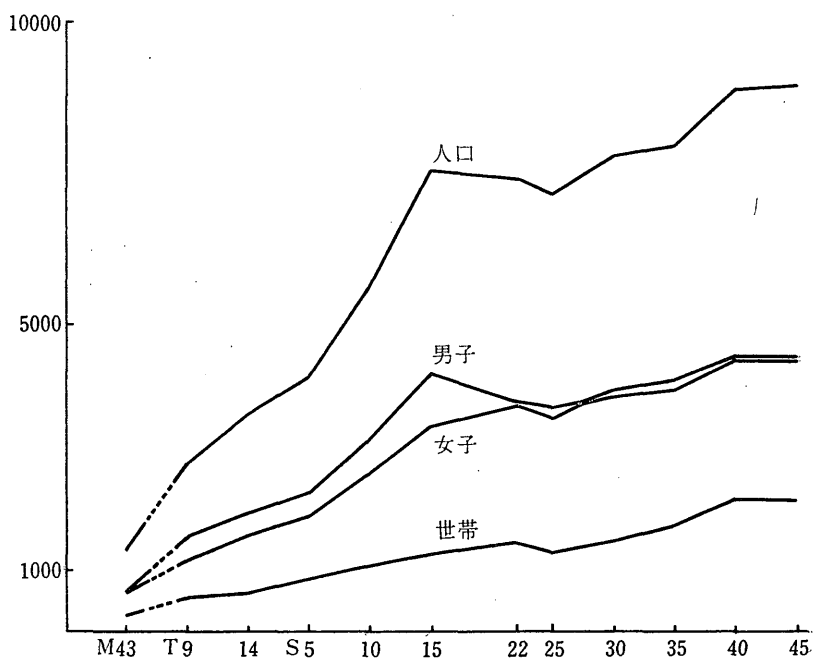


図2 草津町の世帯と人口の推移

る。

草津の名が全国に知られるようになったのは明治11年頃医学者エルイン・ベルツ (Erwin Bälz 1849～1913) の来浴研究によるものであったが、集落の発展は道路の開発に依るところが大きい。明治44年初めて娯楽方面から自動車を通じて入湯者が増大した。更に大正15年草軽電鉄が開通してからは町の人口も急増した。昭和20年の長野原線開通、次いで37年暮坂峠越の自動車道の開通、40年の草津志賀高原ルート開通に次いで45年全線舗装完成と、相次ぐ交通手段の発達に伴って草津の人口は9,000に達した。

・温泉集落の現状

この温泉集落は浴客を対象とする職業構成によって特徴づけられている。いまそれを分析すれば温泉街の世帯数 1,920 のうち観光業 13, 商業 257, サービス業 207, 風俗営業 132 であって、人口 6,800 の温泉街にとっては如何にその比重が大きく、全くの消費都市であることが明らかとなる。サービス業中の温泉旅館は113軒で、多くは自己資本によって経営されている。

この温泉集落は湯治客の旅館街と、固定患者 800人の楽泉園と医療関係集団の鈴蘭によって構成され、その構成がまたこの集落の一特色をなしていた。しかし現在この集落は最近の観光ブームに対応してその性格が変貌しつつある。すなわちかつての来遊者は浴客であったが、今日では観光客に置き換えられつつある。民宿約50は長期湯治客で栄えているが、他の温泉旅館は団体観光客用となっているものが多く、個人のフリー客は宿泊困難である。特に秋10月の候は連日観光客で満員である。このため現在草津には観光資本の進出が見られるようになった。東急観光、ホテルサンバレー、ホテル桜井がこれである。

第2表 草津温泉観光客状況

年 度	S 39	40	41	42	43	44
客 数	780,088	969,890	1,035,999	1,358,768	1,294,412	1,256,360
伸 率	100	124	133	174	160	161

(町観光課)

草津付近には多くの観光資源がある。100 を越える温泉湧出口、白山火山群、世界最強の酸性湖湯釜を以て代表される湖沼群、シャクナゲ、ウルシ、ナナカマドによって代表される四季の植物景観の変化、高原状の熔岩台地、万座山、本白根、横手山スキー場等がそれであって、これに加えるに長野原線の電化と長野原上野間の一〇六本の直行急行は、京浜と草津との時間距離を4時間に短縮して益々観光産業の発達を促し、道路の開発舗装化、宿泊施設の増設、観光情報センターの開設など、地域住民の観光開発意欲が旺盛になればなる程、草津温泉集落は観光温泉集落へと変貌して行くであろう。

Ⅳ 過疎村六^{くに}合村の様相

1970年10月17日朝7時、長野原^{おおし}発太子行の列車はディーゼルカー1輛で乗客は9人しかなかった。太子駅は六合村に入る唯一の駅だが、今はホームも駅舎も雑草に被われた無人駅である。一日4往復のこのローカル線は平均1日50人の乗客しかなく、11月から廃止の運命にあるという。昭和20年群馬鉄山の鉾石輸送のため開設された太子駅は、閉山のためその使命を失い、その後は村人の脚として存続したが、交通量の減少からこうした結果が導かれたのである。

こうした事象は山村六合村の過疎現象の一面であって、伝統的な山村経済の転換が必要であり、村当局もその対策を計画実施中であるが、それには過疎化を導く村の背景を考慮しなければならない。

(1) 人口の推移と動向

六合村⁴⁾は吾妻川の支流須川(白砂川)流域の山村であって23の自然村から構成され、その面積は202.72km²、人口は2,580人(S.45)である。

村の93%は山林と原野で、火山砕屑岩の上を被う火山灰腐植土壌の台地と河岸段丘の上に耕地と集落が散在する。集落の高度は南の吹久保で740m、北の熊倉で1,150mある。

人口の増減は高度経済成長の社会では地域発展のバロメーターとされている。第3表は六合村の世帯人口の動向を示すものであるが、これによれば六合村では

第3表 六合村の部落別住民登録世帯・人口の動向

(10月末, S45のみ9月末現在)

年 度		29		35		40		45		40～45
自 然 村		世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世 帯	人口	減少率
小 雨 沼 尾 梨 木 品 木 田 代 小 倉 長 平 根 広 和 光 引 沼 花 敷 世 立 京 塚 鍛 治 生 須 赤 岩 広 池 下 沢 中 組 八 幡 湯 久 太 子 (日 鋼) 元 山		61	290	53	259	67	305	62	228	25.3%
		11	54	10	50	12	51	10	82	37.3
		21	111	21	108	30	111	18	84	24.3
		16	101	17	88	7	44	7	36	18.2
		14	92	15	104	16	104	14	90	14.7
		21	111	20	98	22	87	20	87	0.0
		15	55	13	47	11	37	8	27	21.6
		25	135	24	120	22	110	22	112	+1.8
		36	211	26	179	26	157	26	140	10.8
		44	236	44	210	57	210	58	206	2.0
京 塚 鍛 治 生 須 赤 岩 広 池 下 沢 中 組 八 幡 湯 久 太 子 (日 鋼) 元 山		26	86	23	61	23	72	14	54	25.0
		48	252	48	253	45	208	40	177	14.9
		18	112	19	114	19	102	19	85	16.7
		12	49	11	50	11	47	9	38	19.1
		22	130	20	122	20	106	20	95	10.4
		48	292	48	274	49	245	50	224	8.8
		47	269	56	287	56	267	41	195	27.0
		26	146	26	139	24	121	22	98	19.0
		26	148	23	138	24	125	25	120	4.0
		29	156	35	179	36	169	38	164	3.0
湯 久 太 子 (日 鋼) 元 山		26	152	28	157	27	136	29	130	4.6
		50	245	44	209	43	194	41	168	13.4
		31	126	38	146	0		(高間)11	43	
		76	341	69	256	10	40	(熊倉)7	26	35.0
計		749	3,900	731	3,657	659	3,048	611	2,661	12.7

最近著しい人口減少が行われている。過疎現象の具体的指標として人口減少率年2%以上, S.35～40年で10%以上を適用すれば, 明かに六合村は過疎村である。

即ち35～45年の10年間の年平均人口減少率は2.76%で, 40～45年の5年間の減少率は12.7%である。また35～45年の10年間には差引120の挙家離村が見られ,

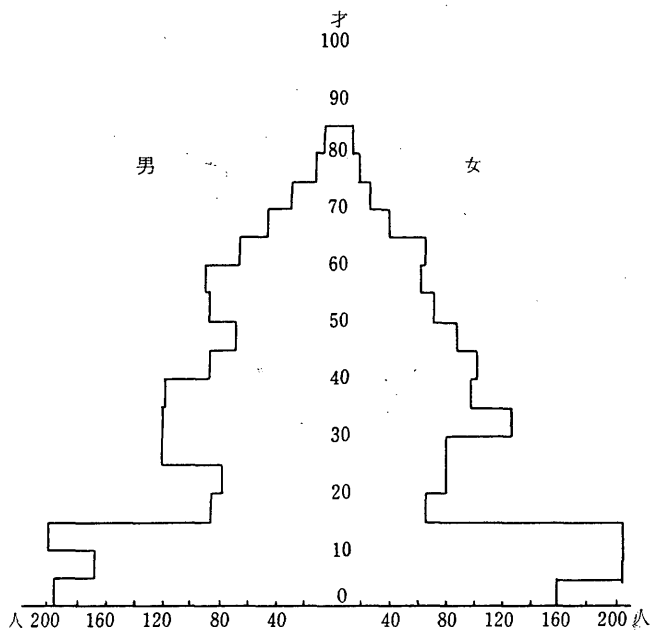
吾妻川上流限界地域における高距集落の社会・経済地理学的研究

世帯数に於ては16.4%の減少である。その一因をなすものは群馬鉄山の閉山であるが、40年以後の減少には殆んど影響していないから、最近の減少は都市への流出に基くものである。

第4表 六合村の人口動態

年次	出生	死亡	自然増	転入	転出	社会減	差引
S.37	62	25	37	117	244	-127	-90
38	59	23	36	120	283	-163	-127
39	56	21	35	203	397	-194	-159
40	51	35	16	104	361	-257	-241
41	34	23	11	83	245	-162	-151

六合村住民課・経済課資料による



3図 六合村の年齢構成 (S40 センサス)

次に人口動態を見れば第4表の通りで、出生数の逡減に対し死亡数が殆んどコンスタントなので自然増も逡減し、幼年人口が減少の傾向にある。その上年々転入者が減少するのに転出者が増加する傾向にあるので、社会減が年百数十人となり、差引村の人口は急激に減少して過疎村と呼ばれる結果を導いたのである。

更に村の人口を年齢構成の面から分析すれば第3図の如く幼年人口の減少と学卒以上青年層の流出によって、生産年齢人口の老齢化が認められる。

産業別人口は昭和35年には就業者数 1,781人に対して第一次産業65.3%・第二次産業19.4%・第三次産業15.3%であって、この村が純山地農村であることがわかる。昭和40年の就業者数は1,582人で産業別ではそれぞれ57.8%・26.3%・15.9%となって第二次産業の増加が著しい。これはその間に品木ダム（吾妻川水質改善のための石灰投入によって生ずる沈澱物収容のためのダム）建設事業等で一時的に増加したものであるが、それにしても第一次産業が高い比率を示し第三次産業が低いことは、全国的にみてこの村の停滞性を示すものと思われる。

(2) 畑作卓越地域

六合村の耕地はその下限が700m 上限では1,150m を越える標高なので夏期も冷涼で、6～8月の平均気温は湯川発電所（約700m）で21.9℃、上限の熊倉では20.1℃と推定される。そのため限界地域の熊倉・長平・根広・昭光原等では水田が見られない。

耕地は村の総面積の1.6%で全国平均の僅に1/10に過ぎない。水田面積は16haで南部の段丘に認められるが極めて狭小であり、火山碎屑物でできた山麓小平坦面と、谷壁斜面の畑地は水田の16倍で257.1ha、この地域が畑作卓越地域であることを示す。

「坂畑」と呼ばれる傾斜面の畑地にはトウモロコシ、アワ、ヒエで代表される雑穀が広く栽培され、主食として用いられた小麦はいまも重要な主作物である。これに対して地形と気候の制約を受けて水稻栽培は低い地位しか占めない。低暖地の農村が米穀生産に政府の手厚い保護を受けてその栽培面積を拡大したような姿は、限られた土地条件のためここでは見られなかった。最近では草津温泉にその

市場を求めて蔬菜工芸作物の栽培が盛になり、温泉に最も近い梨木・荷付場・沼尾・湯久保・田代原等では花インゲン・トマト・トウモロコシ・ネギ・ダイコン・ナ等蔬菜中心の畑作が行われている。

第5表 六合村の主要収穫農作物 (S42.2.1)

	雑穀	小麦	大豆	大麦	馬鈴薯	水稻	小豆	陸稻	大格	白菜	こんにゃく	甘藷	はないんげん
収穫農家	419	331	413	211	422	151	384	145	410	409	82	299	36
収穫面積	47.2	43.9	31.5	21.2	18.0	14.9	14.1	10.3	8.6	5.9	4.2	4.2	2.4
販売農家	48	19	105	9	29	2	68	—	66	51	50	1	22

中間農業センサス

養蚕は戦後不振であるが、農業収益の上では軽視できない存在である。最近では田代原を中心に肉牛の導入も行われ、火山麓の利用も考えられている。しかし狭小な耕地の散在していることと坂畑が多いので農業の機械化は遅れている。

畑地周縁の林野は 18,952.4ha でその90%は国有林で占められ、私有林は僅かに 8.2%過ぎない。林家67戸の平均所有面積は約 2ha で、林家の44%が 1ha 未満の零細所有である。従って用材生産は私有林と公有林を合せても 7,721m³ で、燃料革命後激減した木炭生産 31,553 俵と合せても、農業所得の半分以下である（農業所得10,101万円、林業所得4,831万円—S.40—）

農家の所得を増大するために入山では、草津温泉の土産物用としてのシイタケ・ナメコ栽培と採集に力を注いでいる。

(3) 未整備な道路

村の幹線道路は東隣の中之条町から暮坂峠を越えて駒沢川沿に生須に出、小雨から草津へ行く草津街道であった。中之条から草津へは馬で一日を要し、峠と草津の中間の生須は宿場町として栄えた。また南方長野原からの道は須川の峡谷に沿って日影・湯久保を経て草津に行く道であって「どうしゃみち」と呼ばれていた。奥地の入山から草津への道は長平草津道や品木草津道があって、入山の住民が草津へ曲物や野菜などを売りに行く道となっていた。これ等の道は現在も 2～

3 m幅の歩道で、現幹線道路の野反長野原線・草津中之条線も更に改修と舗装が必要である。

昭和20年群馬鉄山の鉱石輸送の目的で敷設された長野原線には村で唯一つの駅太子が開設して、翌21年には旅客輸送をはじめ、駅は村の表玄関となった。こうして京浜地方へは時間距離を短縮できたが、鉄山の閉山と村の急激な人口減少で、昭和45年11月以降冬期間の運転は停止された。その上長野原草津間の国鉄バスも運転が朝夕の2回だけになり、村人の交通は極度に不便となった。

(4) 限界地域入山の生活様相

六合村は東西 20km、南北 23km し逆ピラミット形の村で、限界地域の入山には12の自然村がある。六合の特性はこの地域に顕著であると思われるので、以下にその生活様様を示し、過疎化の素因を探ろうと思う。

入山地区の集落の発生に関しては隠田集落だという伝承もあるが確証はない。

文政年間に鈴木牧之の著した秋山記行⁵⁾によれば「是より上州草津の東に当りて、入山村というあり。ここかしこの谷間に五軒・六軒・前後、惣名は入山村にして十一ヶ所にわかる。草津さえ深山の奥なるに、此入山はこと更に深山の奥なれば耕作もできず年中の業は細工物なり。最初に山師の道と申すは此入山の者が峠に奔走する道にして、草津へ商に持ち出す栗毛（割筒）・曲物・下駄・枕・天秤棒・都て右駄のものを細工して交易す」とあって、入山が木地屋集落であったことが立証される。

また明治10年の群馬県の郡村誌⁶⁾には「入山村物産 薇粉百五十貫目、薇繩拾駄、下駄木履百駄、柄杓三百駄、杓子五十駄、中之条町、渋川村、高崎駅諸方ニ輸 outputs。民業 男農商工業及び獵師ヲスル者百七十七戸、女薇繩、菅筵等ヲ事トスルモノ二百十五人……」とあって曲物作りや山菜採集の外、狩猟が行われたことも明かである。曲物製造の中心は小倉で明治40年頃までは盛であったが、その後次第に生産は下降した。それは国有林制度が確立して自由な山取りが困難になり、その上機械製の会津物や金属製品に押されてきたからである。そして現在は入山に1～2の老人の余業の外は殆んど見られなくなった。

吾妻川上流限界地域における高距集落の社会・経済地理学的研究

この地域で「焼蒔」と呼ばれる焼畑耕作は明治末期までは盛に行われた。一戸平均 4ha 程で所有権の有無に関らず適地が選ばれ、主食の稗・粟・そばが作られた。品木では連年耕作して熟畑となったものは耕作者の所有地となった。

養蚕は高冷地のため桑園が霜害を受け易く村の南部ほど盛ではなかった。また水田耕作は平地に恵まれず夏季の気温が低いことから、引沼・世立・京塚に僅に見られるだけで、京塚では夏期の水温が低いので開田試作に失敗した例もある。

入山が純山地農村であったことは第 6 表で明かである。統計年度が 40 年であるから数値に若干の吟味を要する。梨木と品木では建設工業就業数が農林就業者を越えて非常に多い。これは、前記品木ダム建設のための就業者で全く一時的な在住者である。従ってこれを除いて計算すれば全入山就業者の 65% は農林業に従事していることとなる。

しかし農民の約半数は第二種兼農で殆んど専業を欠いている。それは入山が高冷地で低暖地に比し広い耕地を必要とするのに反し、全国算術的平均値の約 2/3、即ち平均 65.6a の耕地しか持っていないからである。余剰労働力は山仕事に向け

第 6 表 産業別就業者数

(S 40. 10. 1)

部落別	総 数	農 林	鉱 業	建設工業	御小売業	運 輸 通信業	サービ ス 業	その他
梨 木	126	45	—	69	2	—	10	—
品 木	115	17	—	97	—	—	—	1
根 広	50	37	1	9	—	—	2	1
和光原	55	44	3	1	2	—	4	1
引 沼	107	51	6	20	10	—	19	1
世 立	93	82	2	5	2	1	1	—
京 塚	50	32	4	4	3	3	3	1
田代原	40	36	1	1	1	1	—	—
小 倉	39	23	—	11	4	—	1	—
長 平	20	12	3	—	2	—	1	2
花 敷	54	6	—	19	4	4	20	1
熊 倉	32	16	3	—	10	—	3	—

センサス

第7表 入山の経営耕地面積

(S43.2.1)

	水 田	普 通 畑	桑 園	果 樹 園	計
梨 木	a	976 a	131 a	a	1,107 a
品 木		650	19	21	690
田 代		1,885			1,885
熊 倉		2,978		15	1,993
小 倉		447			447
長 平		226	74		300
根 広		1,052	438		1,490
和 光		1,368	585		1,953
花 敷		—			0
引 沼	81	1,028	229		1,338
世 立	199	1,725	426	9	2,359
京 塚	18	400	320		738

固定資産概要調査から算出

られ戦後一時4万俵の木炭を出荷したが33年には5,000俵、その後は益々減産して今や殆んど止まっている。それは木炭需要の激減と労働力の不足によるものであるが、一方林道の開発は木材のトラック輸送を可能にし、手間をかけて木炭にするよりもパルプ用材として移出した方が利益が大きいからである。

入山における山林原野は用材の外に副次的な採集経済の場となっている。クリ・クルミ・ゼンマイ・ウド・ワラビ・山芋・きのこ等いわゆる山菜は草津温泉に出荷し、ワラビは貫500円、山芋は300円で取引されている。最近では林蔭を利用したシイタケ・ナメコの栽培も行われ、これも草津の土産物となっている。

更にまた野反湖畔の lindou やアカツル採集も行われ、生花材料として東京市場に直送される。Lindou は一本 3~4 円で売却されよい現金収入となる。採集は多くは婦女子によって行われ、秋季一人10万円の収入を挙げている。

12の小村を結ぶ踏分道は戦後も幅約1~2mの歩道で、小倉から元山(旧西山)に至る道には棧道さえあり道路交通は不便の上に危険さえあった。昭和39年金山林道(花敷から熊倉方面に至るもの)が開通しトラックの入るまでは、小倉から村役場のある小雨までは往復24km一日を要した。このために入山から6~8km

の近距離にある草津温泉集落は住民の最も経済的に依存する町であった。

村落共同体としての入山の諸小村には血族集団としての色彩が残存していた。それは集落の発生にも関係するもので、木地屋の定着に基くものであるとも考えられている。

交通不便な地域の上に富の程度も低く、村民の平均所得が群馬県平均の85%という地域であってみれば、経済的な理由で婚前でも婚家に同居して農耕作業に従事し、後双方の家の相談で挙式する「かりぶん」の慣習が温存するのも当然と思われる。

この地域の部落内婚の比重の高いことは驚く程で、特に和光・原根広では総結婚数の90%がそれである。(第8表)これは住民の日常の交渉圏が甚だ狭く封鎖社会を形成していたことに基くものと思われる。またこれとともに階層分化が行われず格式の平等化された家々の間では、簡易に挙式できるような村落の内部構造もこれを促したものと思われる。

第8表 入山二集落の通婚圏

	和 光 原	根 広	計	%
部 落 内	51	35	86	90
村 内	0	1	1	—
近 隣 村	1	2	3	3
其 他	3	4	7	7
計	55	42	97	100

北関東医学, 1954・1号

一方血族結婚の多いことも注目されている。例えば昭和28年現在で和光原・根広の六親等内の血族結婚は21.7%を占め、実に5組に1組以上が親戚同志の結婚である。この事実をもって、木地曲物の生産の盛であったこの地域は木地師の血族集団の地域であり、その子女は農家に嫁しても日常生活に非常に不慣れであるので、自然同業者間の結婚が多く、同部落同職業の近親結婚が多かったともいわれている⁴⁾。

この地域では「マケ」と呼ばれる血族集団が集落構成の1単位となっている。

「マケ」は本家分家関係の明らかな血縁集団であって、団結が堅く、結を通じて相互扶助した。こうしたマケは集落構成の最大単位であるが、マケの総本家が経済的に豊になると分家を出したので、極端な階層分化が行われることがなく、住民の富の程度は平均化していた。昭和初期から階層分化が進んだが、家運に浮沈があるので、上下層の交替もあり、都市に見られるような富の程度の相異はみられない。12の自然村には独自の或は共通の慣行があった。慣行は小さな村落共同体の生産や生活を保持して行くために必要なもので、現在の急激な社会変動の中にも一部その残影を認めることができる。道普請・共有山の手入れ、学校奉仕などの「オテンマ」は毎戸一人割当ての勤労奉仕であり、冠婚葬祭・屋根替・家普請・畑仕事などの「ホーベ^{ユイ}」と呼ばれる結は、一時の労力不足を補う方法としては小共同体には欠くことのできないものであった。

また娯楽機関の欠除した地域であってみれば、各種の講を組織して精神的安息と共同娯楽の場が求められた。念仏講・御日待・天神講観音講などがそれである。こうした村人の精神的紐帯は長く自然村の崩壊を食止めて来たものと思われる。

富の程度が一様で極端な階層分化が認められないのは山地農村の一特徴であろう。ここには大山林地主は認められない。いま所得と富の程度の指標として各小村の担税能力を見よう。第9表は村民税と固定資産税の住民一人当たりの平均額を示したものである。納税者平均20人前後の自然村であって見れば、大集落の場合よりも平均税額のバラツキは大きくなるはずである。にも係らず固定資産税の平均が約3,000円代と余りの差がなく、不動産所有が平均化している傾向が強い。ただ注意すべきはこの額が45年度のもので、長年の平均値でないことである。村民税で長平・花敷が非常に高額に見えるのは学校職員が居住していたり、花敷の如く温泉場であったりするため、所得の基礎査定の差に基くものである。また固定資産税の平均値が花敷温泉集落だけが高く他は殆んど300~400円代にあることによっても、余り階層化のすすんでいないことが証明される。熊倉の低額なのは戦後の開拓地であるからで、村民税ではむしろ上位にある。

第9表 担 税 能 力

(S45)

税 部落	村 民 税			固 定 資 産 税		
	納税者	課税額	平 均	納税者	課税額	平 均
六合村						
梨 木	15	3,000	200	17	77,250	4,544
品 木	7	2,780	397	10	44,410	4,441
田代原	14	3,080	217	15	46,630	3,109
熊 倉	5	2,140	428	4	6,090	1,523
小 倉	20	11,080	554	15	44,280	2,952
長 平	6	24,840	4,140	11	34,130	3,103
根 広	18	4,820	268	22	76,210	3,464
和光原	27	10,040	372	20	81,200	4,060
花 敷	11	28,200	2,564	12	216,030	18,003
引 沼	34	35,420	1,042	40	128,870	3,222
世 立	39	13,160	337	37	111,680	3,018
京 塚	17	18,330	1,078	15	50,470	3,365

(六合村役場賦課税額調)

入山の小中学校は小規模校でしかも小学校は元山と長平に児童数7人と、9人の2分校を持ち、中学も元山に生徒2名の分校をもっていた。小村が散在し生徒数の少ないことは教育効果の面で不利という判断から、学校の統合が考えられているが、学校が自然村の文化センターである山村では、その廃止は集落の将来に暗い陰を投げるものと住民は受取っている。

第10表 入山地区の生徒数

(S45.4.1)

生徒数	部落	世立	引沼	見寄	京塚	品木	田代原	花敷	和光原	根広	長平	小倉	熊倉	計
小 学 生		28	27	2	12	2	11	5	16	16	4	5	7	135
中 学 生		15	12	2	9	2	10	4	10	6	1	5	1	77

教育委員会資料

こうした限界地域で更に集落の上限を押し上げようとする試みは戦前戦後とも行われた。次にその二例を挙げて今後のテストパイロットにしようと思う。

- ・(a) 田代原は草津温泉と長平・小倉間にある小台地面の集落で、その開拓は

大正初期に始まる。集落の高度は約 1,100m である。

この台地は初め京塚から出作りの行われていた所で、開墾し乍ら蕨繩を造っていた。増反分家して集落が形成されたのは大正も末期であった。入植者の出身地は京塚10, 引沼3, 信州下高井方面3で、集落形成の精神的中核として昭和2年京塚の大神宮を分祀して田代神社を祭っている。その後農耕と製炭と曲物で生計を立てたが、現金収入を増すために養蚕を行う者や、昭和初年に北海道から移入した花インゲンを作って草津土産に販売する者も出た。山菜採集も盛んで現在一戸平均年2万円以上の収益を挙げている。

また昭和31年以来乳牛が導入され、現在21頭を飼育して生乳を明治乳業に出荷している。草津に近いことから最近の新卒者の中には温泉集落に職を求めて通勤している者もある。

入植以来50年、田代原はいま花インゲンと山菜と酪農に依存して、より以前にか開れた集落よりも先進的な経営で安定した集落となっている。

・(b) 戦後の開拓地熊倉は昭和23年満州引揚げの3戸の入植に始まる。耕地の割当ては一戸平均 5ha で、採草地と薪炭林が合せて 0.5ha、畑地が 2ha 他は牧草地となっている。

ここは草津温泉の北部旧群馬鉄山から更に北 2km の台地でその標高は 1,140 ~1,180m である。従って初霜も平均9月27日と早く、晩霜は5月20日である。春の播付けは遅いが夏期は日中の気温が上り花インゲン・トウモロコシが良く生育し、大豆・小豆・そば・馬鈴薯等の栽培も可能である。

入植当時は川水を飲み長く開拓小屋でランプ生活を行ったが、昭和28年12月には漸く無電燈部落から開放され電化生活に入ることができた。昭和37年には簡易水道も敷設され生活の近代化が進んだ。

ここは夏の低温と灌溉用水が不足のため米作は不能であり、飯米購入のためには現金収の道が開かれなければならなかった。入植当時既に元山には群馬鉄山が開発されていたので、入植者は耕作のかたわら鉱夫として収入を得た。鉱山が閉山すると野菜栽培に力を注いだ。ダイコン・インゲン・キャベツ・白菜を草津に

トラック輸送し、更に東京市場へも農協を通じて、トウモロコシ・ダイコン・インゲン・ソバ等が出荷されている。

雑穀蔬菜の大規模経営が可能になったのは大型トラクターの導入と、多くの耕耘機を購入し農耕の機械化を進めたからである。熊倉では入植者の耕地は民屋の近くに集積していて、耕作には非常に便利である。29年民屋の改築新築が始まり、いま集落景には開拓頭初の姿が残らない。最近は牧牛も始めて、酪農家1戸が既に15頭の乳牛を飼育している。他に飼育牛を始めた農家3戸があり、各2頭の和牛を肥育している。

入植以来20年、雑穀と蔬菜と牧牛でいま熊倉は定着しつつある。世代の交替も既に行われつつあり、現在世帯数7戸を数えるに至っている。

V む す び

吾妻川上流地域には標高1,000mを越える高距にいくつかの生活様式の異った集落があり、各々その地区に適応した生活が行われている。

因襲的伝統的な経営形態をもつ第一次産業に従事する既存山地農村には衰退の色が見え、過疎化現象が現れているのに反し、高度経済成長時代に適応或は対応し得た集落では安定発展の様相が認められる。

高原蔬菜の生産に所得の基礎を置き、農地の拡大に熱意を有する浅間山麓の開拓村や温泉集落に市場を開拓した熊倉・田代原は、次第に生活に安定性を加えて定住集落となり、古くからの湯治場草津温泉集落は最近の観光レジャーブームに対応してその発展を続けている。

一方地下資源に依存する鉱山集落は、その生産が輸入鉱物資源との競合によって大きく浮沈し、現在は衰微し或は廃村となったものもある。

(付記) この小論の作成に当って常々土地利用や山地集落について御指導を得、また未完な原稿を御閲覧下さった西水孜郎・上野福男両博士に深謝の意を表します。

参 考 文 献

- (1) 江波戸昭：日本農業の地域分析，pp. 144～166，S 40
- (2) 上野福男：高冷地域の土地利用，現代地理講座 山地の地理 pp. 259～262
- (3) 草津町観光課：草津温泉観光要覧 S 45
- (4) 杉本寿：封建山村構造研究 S 29
- (5) 鈴木牧之：秋山記行 越佐叢書第五卷
- (6) 群馬県教育委員会：六合村の民俗 S 38